病性鑑定を実施した牛白血病の発生状況と病理学的検索

中丹家畜保健衛生所
○万所幸喜　種子田功

【はじめに】牛白血病の発生増加に伴い、当所での本病の病理診断例数も増加した。過去の症例について発生状況を調査するとともに、主要病変部位と腫瘍細胞の形態学的分類による病理学的検索を試みた。**【方法】**H15～26年度に病理診断を実施した79例の用途、月齢、肉眼病変部位、病変部の腫瘍細胞について調査した。腫瘍細胞は形態から、リンパ球様；Lc、前リンパ球様；Pl、リンパ芽球様；Lb、組織球様；Hcの4種類に分類し、形態的に異なる2種類以上腫瘍細胞を認めたものを多形性とした。**【結果】**病理診断例数はH21年度以降増加し、H19年度以降、肥育牛の診断例が散見された。肉眼病変を多く認めた部位は、心臓75.9%、腎臓62.0%、第四胃55.7%、脾臓45.6%であった。少なかったのは骨格筋11.4%、横隔膜7.6%、膀胱3.8%でH21年度以降の診断例で認めた。腫瘍細胞の形態は全症例の、Lb89.9%、Hc16.5%、Pl13.9%、Lc6.3%で認め、多形性は25.3%で認めた。**【考察】**診断例数の増加に伴い、肥育牛の発症や腫瘍細胞の多形性を認める症例が散見されるようになり、本病の病態が多様化してきた可能性が窺われた。現在、更に詳細なデータを集積するためリンパ球マーカーを用いた腫瘍細胞の分類を実施している。今後はウイルス学的な見地からも調査を継続し、本病発生の動向について詳細に分析していく。